

浅間山の火山活動解説資料（平成 29 年 9 月）

気象庁地震火山部
火山監視・警報センター

山頂火口直下のごく浅い所を震源とする体を感じない火山性地震の活動は、2015年4月頃から高まった状態で経過しています。また、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量¹⁾は多い状態で、微弱な火映²⁾が時々観測されるなど、火山活動はやや活発な状態で経過しています。

今後も火口周辺に影響を及ぼす小規模な噴火が発生する可能性がありますので、山頂火口から概ね2kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石³⁾に警戒してください。登山者等は地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。また、風下側では降灰及び風の影響を受ける小さな噴石³⁾に注意してください。

平成27年6月11日に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを1（活火山であることに留意）から2（火口周辺規制）に引き上げました。その後、警報事項に変更はありません。

○ 活動概況

・噴煙など表面現象の状況（図1、図2、図3-②④、図4-②、表1）

山頂火口からの白色の噴煙は火口縁上概ね600m以下で経過しました。

山頂火口では、2016年12月末頃から夜間に高感度の監視カメラで確認できる程度の微弱な火映を時々観測しています。

・火山ガスの状況（図3-③、図4-③、表1）

今期間実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は1日あたり800～1,100トン（8月：200～1,100トン）と多い状態でした。

・地震や微動の発生状況（図3-⑤～⑧、図4-④～⑧、図5、図10）

山頂火口直下のごく浅い所を震源とする体を感じない火山性地震は、やや少ない状態で経過しましたが、地震活動の高まりが始まった2015年4月以前の状態には戻っていません。発生した地震の多くはBL型地震（低周波地震）でした。

火山性微動は、引き続き時々発生しました。

・地殻変動の状況（図3-⑨⑩、図4-⑨⑩、図6～9、図11）

塩野山の傾斜計⁴⁾で2016年12月頃からみられている西または北西上がりの緩やかな変化は、鈍化しながらも継続しています。国土地理院のGNSS⁵⁾連続観測によると、浅間山の西部の基線で2017年1月頃から小さな伸びがみられています。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページ (http://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_vact_doc/monthly_vact.php) でも閲覧することができます。

次回の火山活動解説資料（平成29年10月分）は平成29年11月9日に発表する予定です。

この資料は気象庁のほか、関東地方整備局、東京大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所及び長野県のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』『数値地図25000（行政界・海岸線）』を使用しています（承認番号：平26情使、第578号）。

- 1) 火口から放出される火山ガスには、マグマに溶けていた水蒸気や二酸化硫黄、硫化水素など様々な成分が含まれており、これらのうち、二酸化硫黄はマグマが浅部へ上昇するとその放出量が増加します。気象庁では、二酸化硫黄の放出量を観測し、火山活動の評価に活用しています。
- 2) 赤熱した溶岩や高温のガス等が、噴煙や雲に映って明るく見える現象です。
- 3) 噴石は、その大きさによる風の影響の程度の違いによって到達範囲が大きく異なります。本文中「大きな噴石」とは「風の影響を受けず弾道を描いて飛散する大きな噴石」のことであり、「小さな噴石」とはそれより小さく「風に流されて降る小さな噴石」のことです。
- 4) 火山活動による山体の傾きを精密に観測する機器。火山体直下へのマグマの貫入等により変化が観測されることがあります。1 マイクロラジアンは 1 km 先が 1 mm 上下するような変化量です。
- 5) GNSS (Global Navigation Satellite Systems) とは、GPS をはじめとする衛星測位システム全般を示す呼称です。



図1 浅間山 山頂部の噴煙の状況

(左：鬼押監視カメラ（9月1日） 右：黒斑山監視カメラ（長野県）（9月15日）)

- ・今期間、白色の噴煙が火口縁上概ね 600m以下で経過しています。



図2 浅間山 火映の状況

黒斑山監視カメラ（長野県）（9月14日）

- ・夜間に高感度の監視カメラで確認できる程度の微弱な火映を時々観測しています（白丸内）。

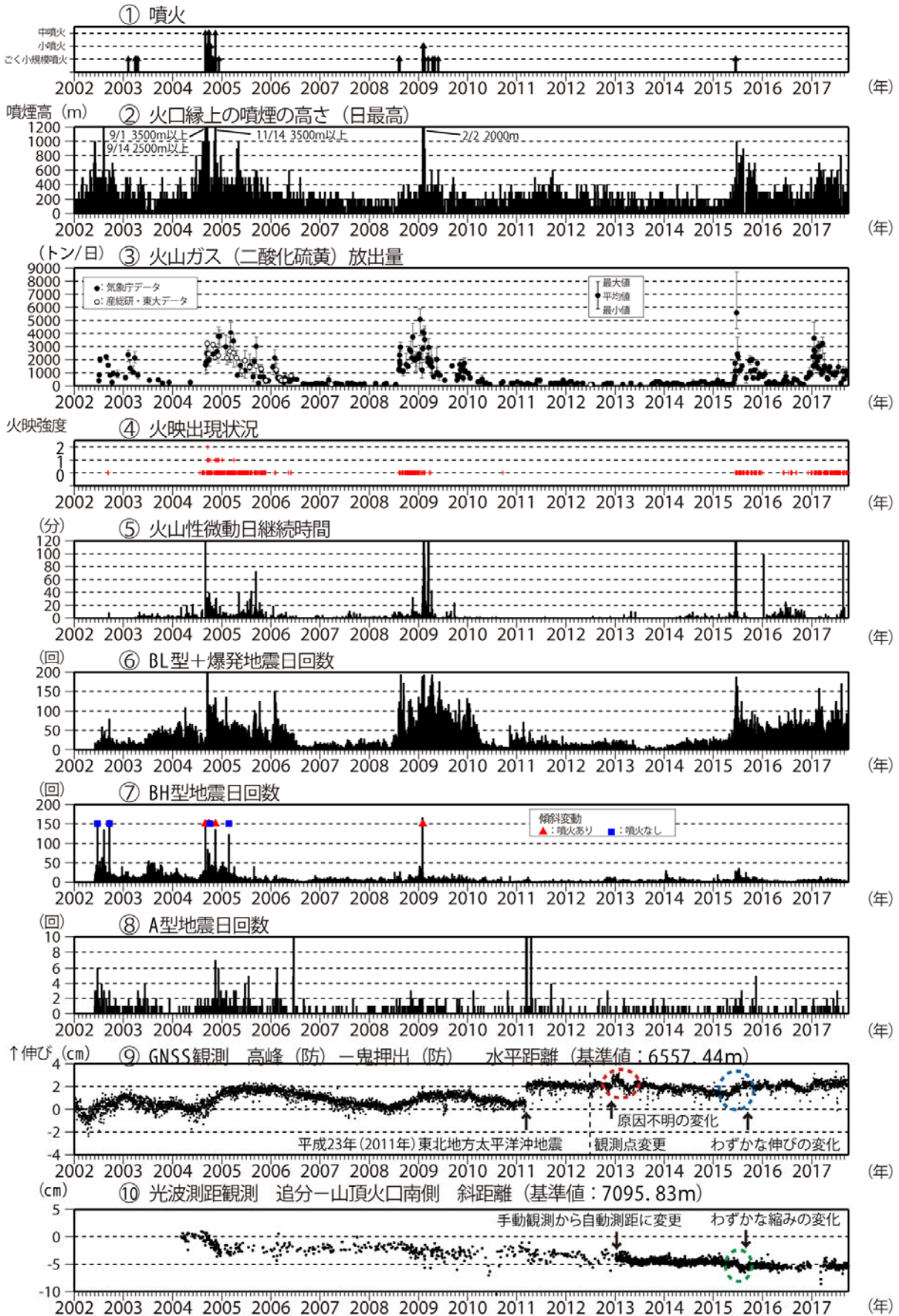


図3 浅間山 火山活動経過図 (2002年1月1日~2017年9月30日)

※図の説明は次ページに掲載しています。

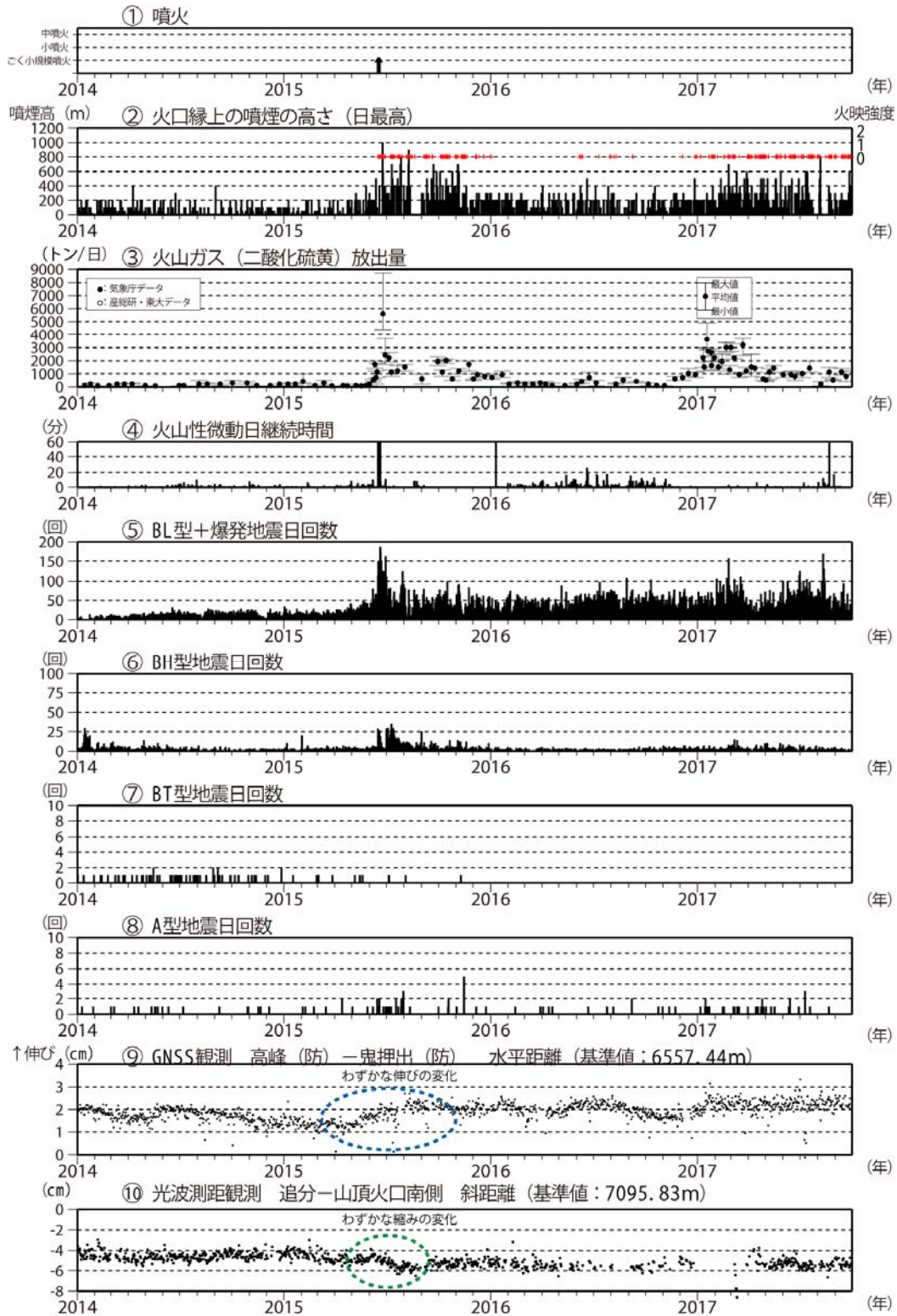


図 4 浅間山 最近の火山活動経過図（2014 年 1 月 1 日～2017 年 9 月 30 日）

図 3 及び図 4 の説明

- 図 3 ④、図 4 ② 赤印は火映を示します。強度については 9 ページの脚注 9) を参照してください。
- ③ 国立研究開発法人産業技術総合研究所及び東京大学による観測結果が含まれています。
- 図 3 ⑥～⑧、図 4 ⑤～⑧ 火山性地震の種類については図 10 を参照してください。
- ⑨ 2012 年 7 月 31 日まで 気象庁の高峰一鬼押観測点間の基線長（基準値 7416.60m）。
2012 年 8 月 1 日以降 防災科学技術研究所の高峰一鬼押出観測点間の基線長。
2010 年 10 月以降のデータについては、電離層の影響を補正する等、解析方法を改良しています。
（防）は国立研究開発法人防災科学技術研究所の観測機器を示します。

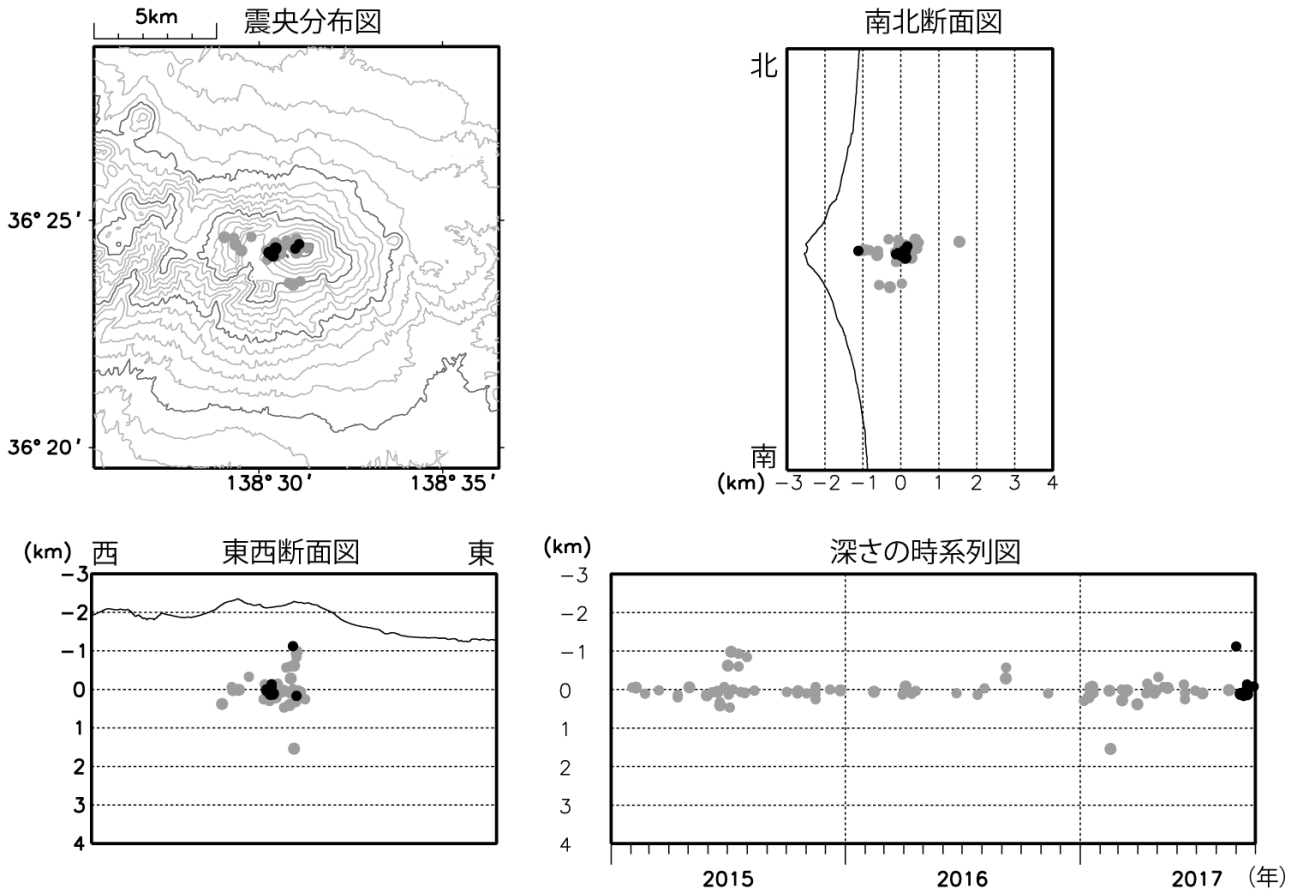


図5 浅間山 震源分布図 (2015年1月1日~2017年9月30日)

- : 2015年1月1日~2017年8月31日
- : 2017年9月1日~9月30日

- ・火山性地震の回数は多い状況ですが、P、S相が不明瞭なものも多いため、震源の求まる火山性地震は少ない状況です。
- ・火山性地震は、これまでの震源の分布域内で発生しています。

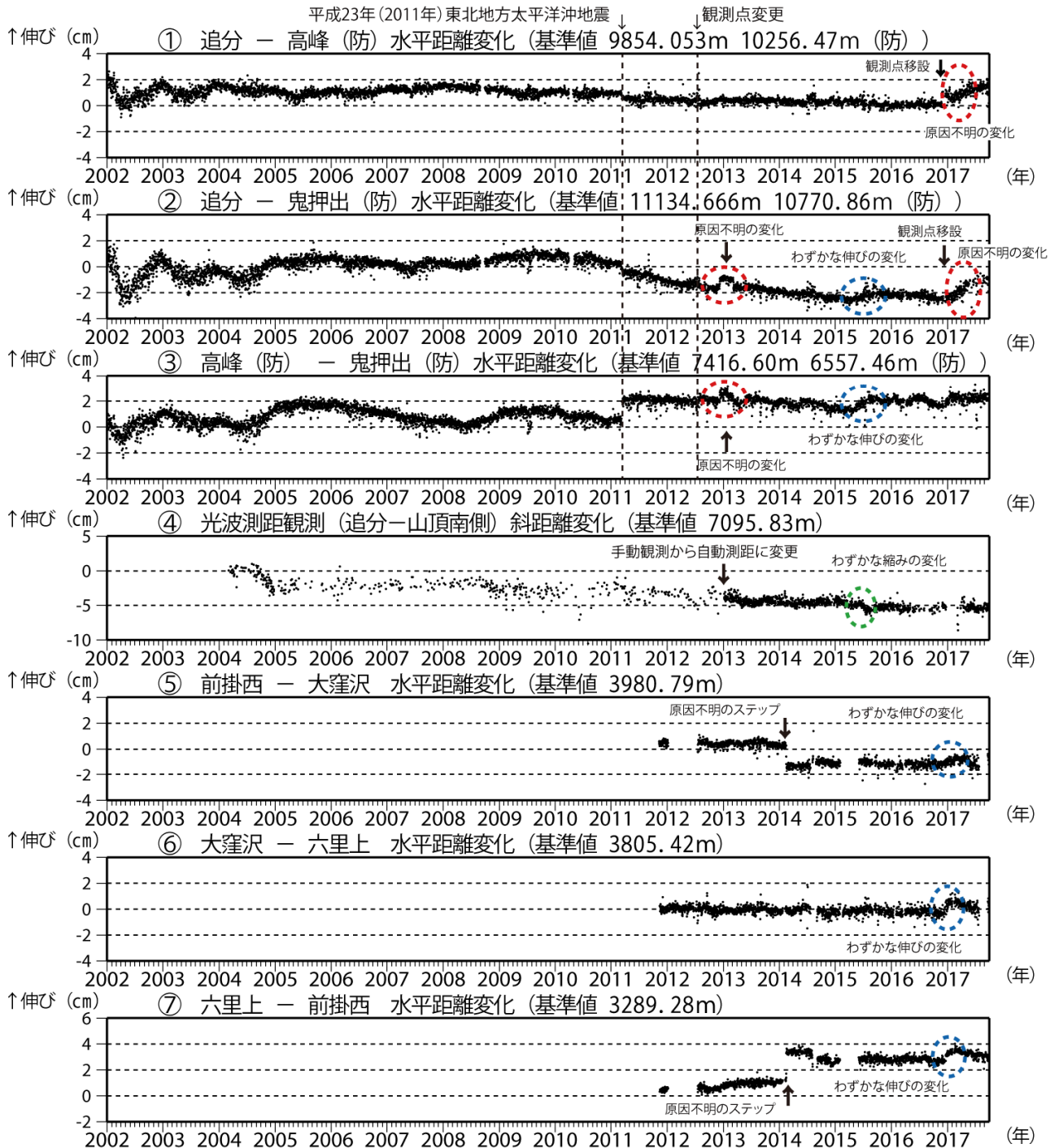


図 6 浅間山 GNSS 連続観測及び光波測距観測の結果 (2002 年 1 月 1 日～2017 年 9 月 30 日) GNSS の 2010 年 10 月以降のデータについては、電離層の影響を補正する等、解析方法を改良しました。(防) は国立研究開発法人防災科学技術研究所の観測機器を示しています。

- ①～⑦は図 7 の①～⑦にそれぞれ対応しています。
- ①②追分観測点は、2016 年 12 月に移設しています。
- ③ 2002 年 1 月 1 日～2012 年 7 月 31 日 気象庁の高峰－鬼押出観測点間の水平距離。
2012 年 8 月 1 日～ 防災科学技術研究所の高峰－鬼押出観測点間の水平距離。

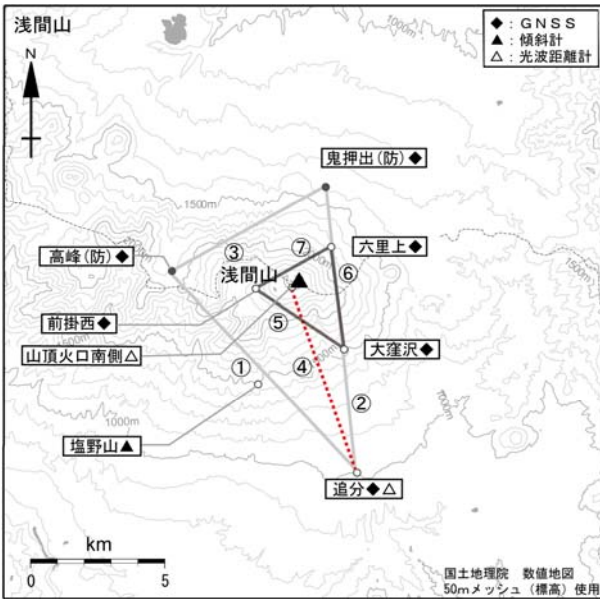


図7 浅間山 地殻変動連続観測点配置図
 小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
 （防）：国立研究開発法人防災科学技術研究所
 GNSS 基線③は図3及び図4の⑨に、光波測距測線④は図3及び図4の⑩、図6の④にそれぞれ対応しています。GNSS 基線①～③及び⑤～⑦は図6の①～③及び⑤～⑦にそれぞれ対応しています。

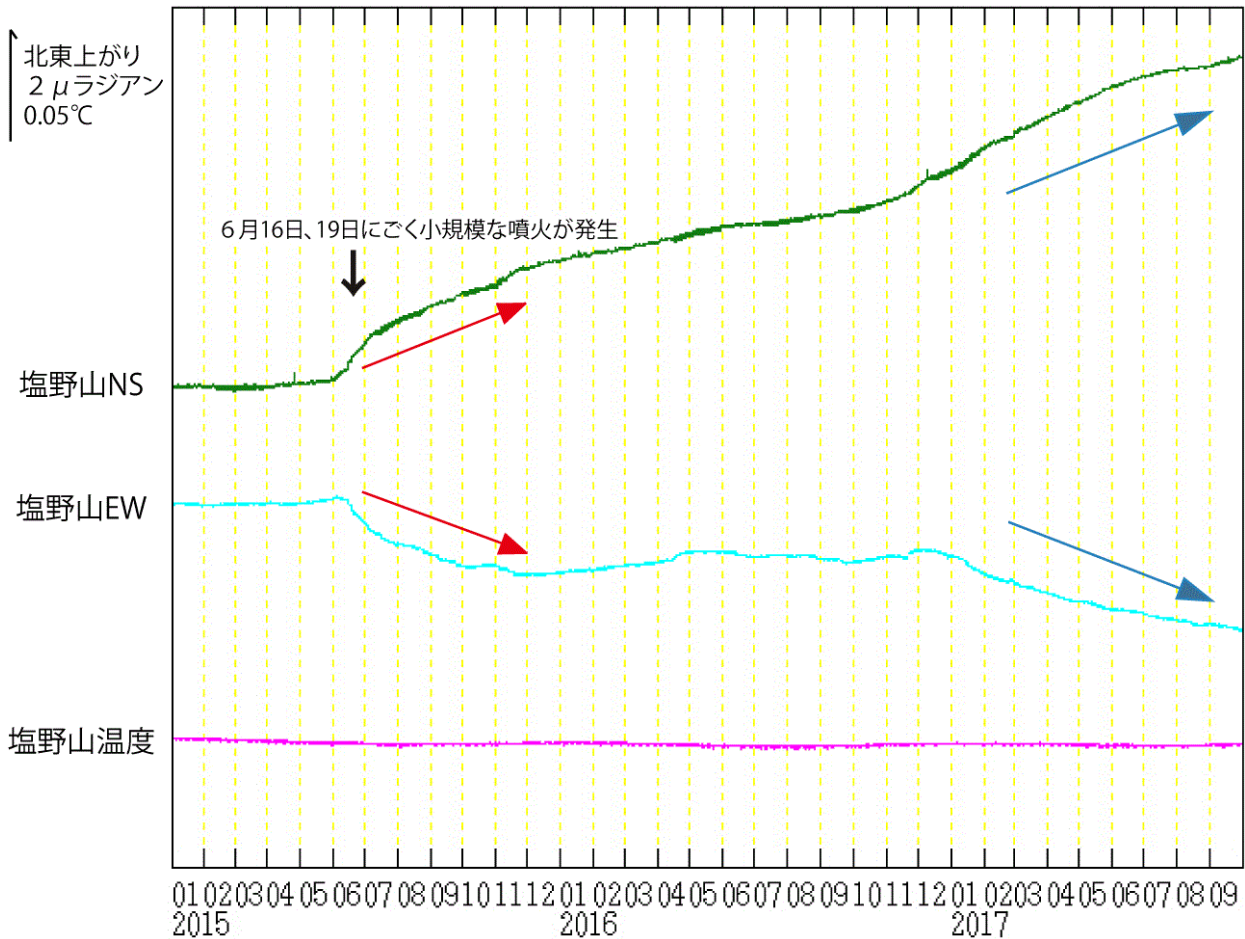


図8 浅間山 塩野山観測点における傾斜データ（2015年1月1日～2017年9月30日）
 ・2015年6月上旬頃から山頂西側のやや深いところが膨張源と考えられる緩やかな変化がみられました。この活動に関連し変化が大きかった部分を赤矢印で示しています。
 ・2016年12月以降、2015年と同様の変化がみられており（青矢印）、変化は鈍化しながらも継続しています。
 * データは時間平均値を使用しており、2015年6月までの変化が小さくなるように補正しています。

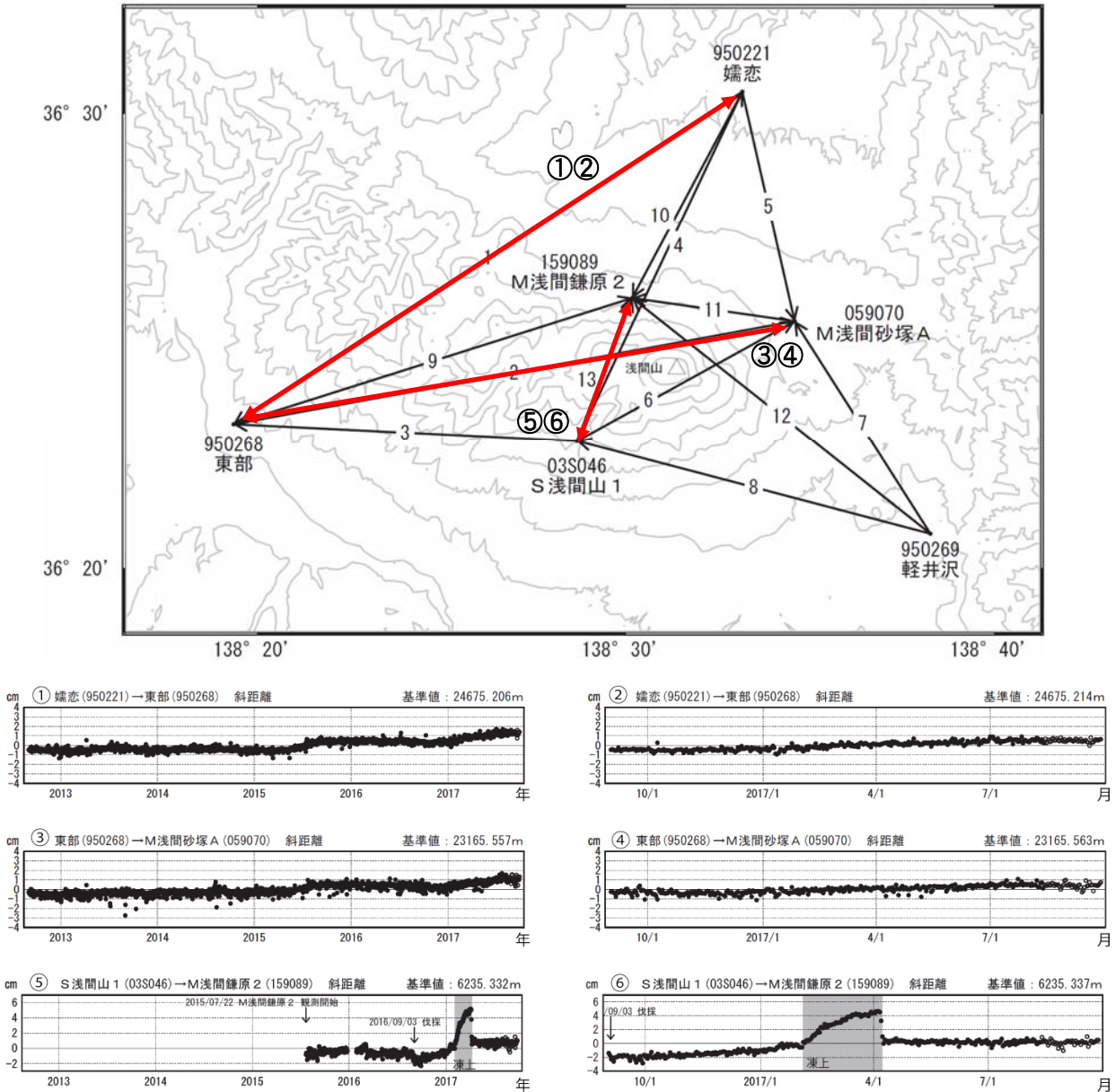


図 9 浅間山 国土地理院による地殻変動観測結果⁶⁾

(①③⑤)2012 年 9 月 1 日～2017 年 9 月 26 日、(②④⑥)2016 年 9 月 1 日～2017 年 9 月 26 日)

●最終解 ○速報解

・国土地理院によると浅間山の西部の基線で 2017 年 1 月頃から小さな伸びがみられています。

①②のグラフ： 孺恋に対する東部の斜距離の変化

③④のグラフ： 東部に対する M 浅間砂塚 A の斜距離の変化

⑤⑥のグラフ： S 浅間山 1 に対する M 浅間鎌原 2 の斜距離の変化

(注 1) 「M 浅間鎌原 2」について

- ・ 2015 年 12 月下旬から 2016 年 1 月 27 日まで凍上（土壌の凍結による地面の隆起）によって装置が傾斜したため、表示していません。
- ・ 2016 年 1 月 27 日に装置の再設置を行った際の変化を補正しました。
- ・ 2016 年 11 月 10 日に装置の再設置を行った際の変化を補正しました。
- ・ M 浅間鎌原 2 に関係する基線で 2017 年 2 月頃から見られる急激な変動は、凍上による装置の傾斜が原因です。

6) 最終解は国際的な GNSS 観測機関 (IGS) が計算した GNSS 衛星の最終の軌道情報 (精密暦) で解析した結果で、最も精度の高いものです。速報解は速報的な軌道情報による解析結果で、最終解に比べ精度は若干下回りますが、早期に解を得ることができます。

表 1 浅間山 2017 年 9 月の火山活動状況

9月	噴火回数	火山性地震の回数 ⁷⁾						微動回数	噴煙の状況 ⁸⁾		火映強度 ⁹⁾	備考
		A型	BH型	BL型	E×型	その他	地震合計		日最高(m)	噴煙量		
1日	0	0	5	15	0	0	20	0	300	2	0	
2日	0	0	3	58	0	1	62	0	X	X	0	
3日	0	0	1	17	0	0	18	0	100	1	-	
4日	0	0	2	27	0	0	29	0	200	1	0	
5日	0	0	0	46	0	1	47	1	100	1	-	
6日	0	0	1	20	0	0	21	0	X	X	-	
7日	0	1	2	49	0	0	52	0	X	X	-	
8日	0	0	0	32	0	0	32	0	X	X	-	
9日	0	0	0	28	0	2	30	1	200	2	-	
10日	0	0	2	28	0	0	30	1	200	1	-	
11日	0	0	1	35	0	1	37	0	X	X	-	
12日	0	0	0	47	0	0	47	0	X	X	0	
13日	0	0	4	71	0	0	75	0	300	2	0	火山ガス(二酸化硫黄)の放出量 1,100トン/日
14日	0	0	2	67	0	0	69	0	200	1	0	
15日	0	0	0	29	0	0	29	0	200	1	0	
16日	0	0	2	94	0	0	96	0	-	-	0	
17日	0	3	0	21	0	0	24	0	X	X	-	
18日	0	0	2	34	0	0	36	0	200	2	0	
19日	0	0	1	41	0	0	42	0	-	-	0	
20日	0	0	0	8	0	0	8	0	-	-	-	
21日	0	0	0	19	0	0	19	0	200	1	0	火山ガス(二酸化硫黄)の放出量 800トン/日
22日	0	0	0	26	0	0	26	0	200	2	0	
23日	0	0	1	67	0	3	71	0	200	1	-	
24日	0	0	1	20	0	0	21	0	200	1	0	
25日	0	1	2	24	0	0	27	0	300	1	0	
26日	0	0	1	16	0	0	17	0	600	3	0	
27日	0	0	0	26	0	0	26	0	-	-	0	
28日	0	1	0	40	0	0	41	0	X	X	0	
29日	0	0	0	21	0	0	21	0	400	3	0	
30日	0	0	2	32	0	0	34	0	200	1	0	
合計	0	6	35	1058	0	8	1107	3				

7) 火山性地震の計数基準は石尊観測点で最大振幅 0.1 μm 以上、S-P 時間3秒以内です。
火山性地震の種類は図 10 のとおりです。

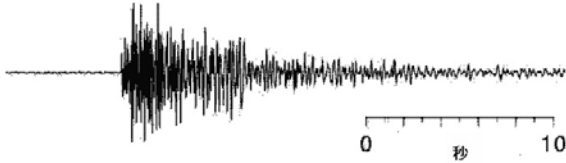
8) 噴煙の高さと噴煙量は定時観測(09 時・15 時)の日最大値です。噴煙量は以下の7階級で観測しています。

- 1: 極めて少量 2: 少量 3: 中量 4: やや多量 5: 多量 6: 極めて多量
7: 噴煙量6以上の大噴火。噴煙が山体を覆うぐらい多く、噴煙の高さは成層圏まで達したとみられる
-: 噴煙なし ×: 不明

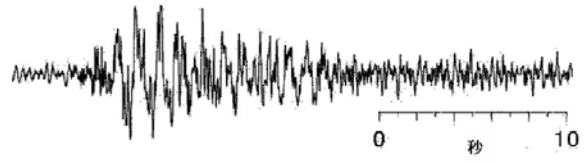
9) 火映の強度は以下の4段階で観測しています。

- 0: 肉眼では確認できず、高感度の監視カメラでのみ確認できる程度 1: 肉眼でようやく認められる程度
2: 肉眼で明らかに認められる程度 3: 肉眼で非常に明るい色で異常に感じる程度
-: 火映なし ×: 視程不良(夜間観測できなかった場合)

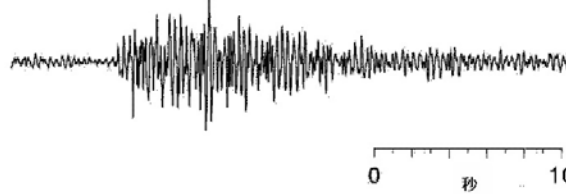
A型地震：P,S相が明瞭で卓越周波数は
10Hz前後と高周波の地震



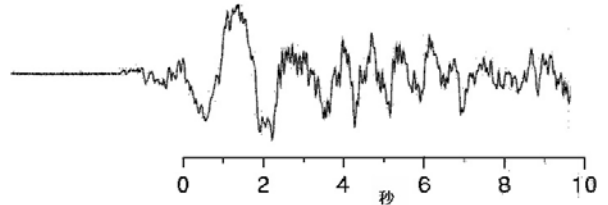
BL型地震：P,S相が不明瞭で卓越周波数が
約3Hz以下の地震



BH型地震：S相が不明瞭で卓越周波数が
約3Hz以上の地震



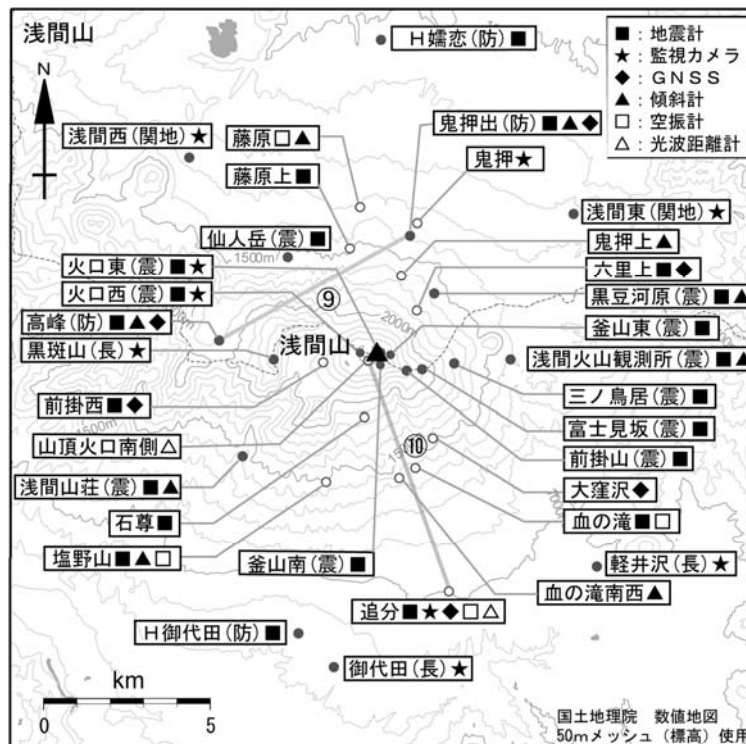
EX型地震(爆発型)：爆発的噴火に伴って発生する地震



BT型地震：一定周波数の振動がゆっくりと
減衰していく地震



図 10 浅間山 主な火山性地震の特徴と波形例



小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
 (国)：国土地理院、(防)：防災科学技術研究所、(震)：東京大学地震研究所、
 (関地)：関東地方整備局、(長)：長野県

図 11 浅間山 観測点配置図

GNSS 基線⑨は図 3 及び図 4 の⑨、図 6 の③に対応しています。
 光波測距測線⑩は図 3 及び図 4 の⑩、図 6 の④に対応しています。